



平成28年3月17日
東京税関

切花の輸入

切花の輸入額は増加傾向。国別ではコロンビアが初の首位。

2015年の輸入額は過去最大となるも、輸入数量(重量)は減少。

3月、8～9月、12月に輸入が増加。

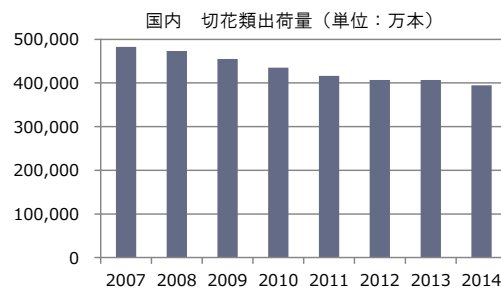
成田空港が輸入数量の3割、輸入金額の4割弱を占め、全国の港で1位。



はじめに

春になり、花にまつわる話題が増える季節となりました。卒業式など記念行事の多い時期なので、花束などを目にする機会も多いのではないのでしょうか。

農林水産省の統計によれば、国内の切花の出荷量は減少していますが、消費者の切花の購入金額については下げ止まりが見られるとのことです。



出典：農林水産省「花き生産出荷統計」

また、「フラワーバレンタイン」の取組みなど、新しい需要の創出も行われています。

日本における切花の市場は、国内産が8割、輸入品が2割程度の量のようです。

切花の輸入額は増加傾向ですが、輸入量は本数ベースでは微減となっています。

3月は、一年で最も切花の輸入が多い月です。

今回は、「切花の輸入」にスポットを当ててみました。

本特集の「切花」は、輸入統計品目番号 0603 に分類される以下のものについてまとめたものです。

ばら	2002年～2006年 0603. 10-040 2007年～ 0603. 11-000
カーネーション	2002年～2006年 0603. 10-050 2007年～ 0603. 12-000
らん	2002年～2006年 0603. 10-010 (ラン科のもの) 2007年～ 0603. 13-000
菊	2002年～2006年 0603. 10-020 (キク属のもの) 2007年～ 0603. 14-000
ゆり	2002年～2006年 0603. 10-030 (ユリ属のもの) 2007年～2011年 0603. 19-010 (ユリ属のもの) 2012年～ 0603. 15-000 (リリウム属のもの)
その他のもの(生鮮)	2002年～2006年 0603. 10-090 2007年～2011年 0603. 19-090 2012年～ 0603. 19-000
その他のもの	0603. 90-000



輸入動向

輸入額は増加、数量は減少傾向

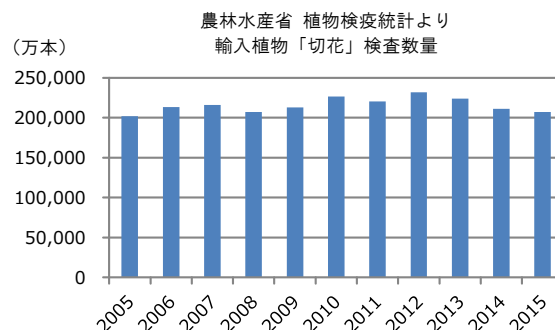
切花の輸入額は、年毎に増減はあるものの増加傾向で、昨年（2015年）の輸入額は392億円と過去最大となりました。これは、10年前（2005年）の約1.5倍、15年前の約2倍の金額となります。

特にコロンビア産のカーネーション、マレーシア産の菊などの増加が大きくなっています。

増加の要因としては様々な要因がありますが、為替の影響も大きいようです。

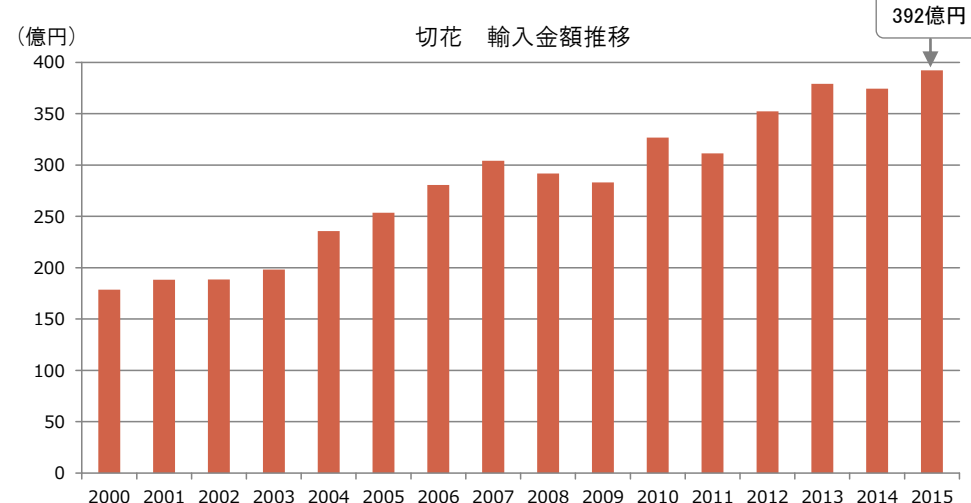
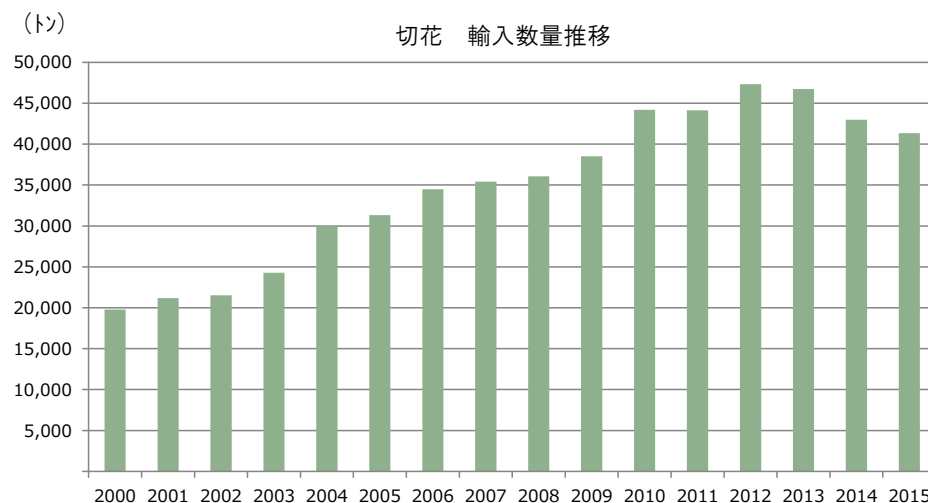
なお、輸入数量（重量）については、3年連続の減少となっています。

貿易統計は重量ベースですが、農林水産省の本数ベースの統計を見ますと、重量ベースほど大きな増減にはなっておらず、若干の乖離があるようです。



切花 輸入数量・金額

年	数量(トン)	前年比	金額(億円)	前年比
2000年	19,796	109.7%	179	102.6%
2001年	21,191	107.1%	188	105.4%
2002年	21,507	101.5%	189	100.1%
2003年	24,275	112.9%	198	105.1%
2004年	29,918	123.2%	236	119.0%
2005年	31,308	104.6%	254	107.6%
2006年	34,481	110.1%	281	110.6%
2007年	35,408	102.7%	304	108.4%
2008年	36,053	101.8%	292	95.9%
2009年	38,519	106.8%	283	97.0%
2010年	44,198	114.7%	327	115.4%
2011年	44,139	99.9%	311	95.3%
2012年	47,337	107.2%	352	113.1%
2013年	46,748	98.8%	379	107.6%
2014年	42,978	91.9%	374	98.7%
2015年	41,337	96.2%	392	104.7%





輸入動向（月別）

輸入の増加が年3回

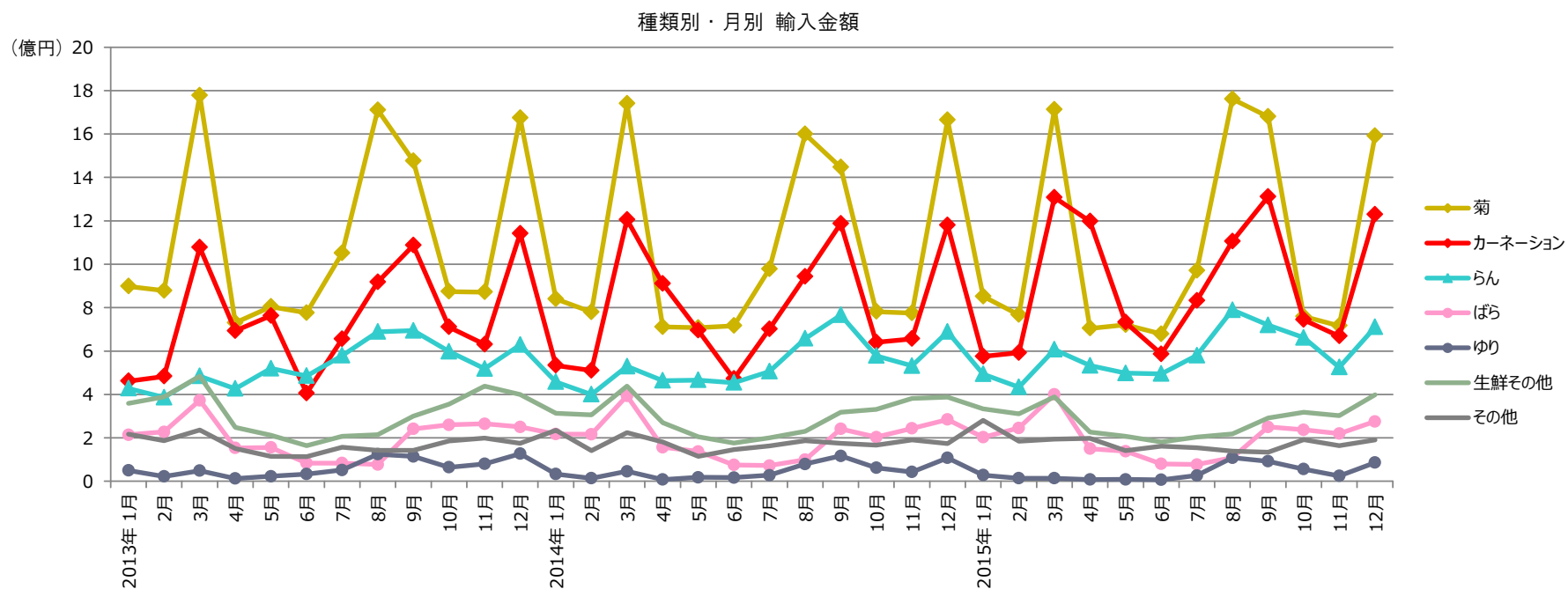
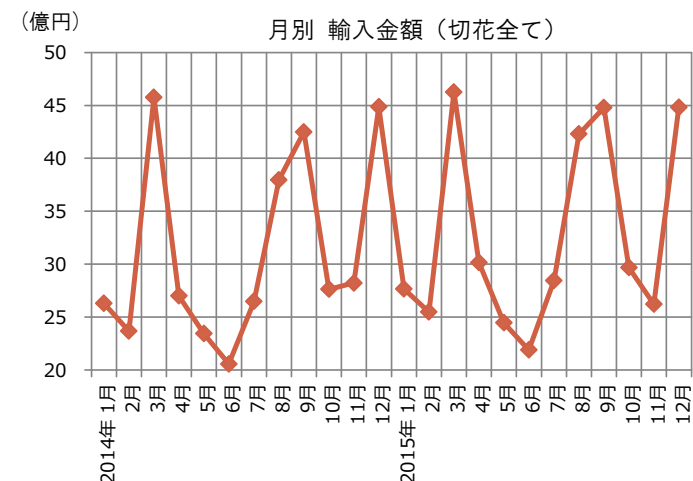
切花の輸入額を月別に見ますと、輸入の増加が年に3回（3月、8～9月、12月）あることが分かります。特に菊、カーネーションについては、この動きが顕著となっています。

これは主に春彼岸、お盆・秋彼岸、正月用としての需要によるものです。

日本における切花の需要は、彼岸などの仏事や正月の需要が大きく、輸入額の変動の大きな要因となっています。

ばらについては、3月が最も多くなっていますが、これは卒業式などの記念行事が多いことによるものです。

カーネーションについては、「母の日」（5月第2日曜日）の需要もありますが、ばら同様、3月の記念行事での需要が大きいようです。



輸入動向（国・地域別）

コロンビアが輸入額で初の首位に

切花の輸入額を国・地域別に見ますと、コロンビアが4年連続で増加し、2015年は国・地域別で初の首位となりました。

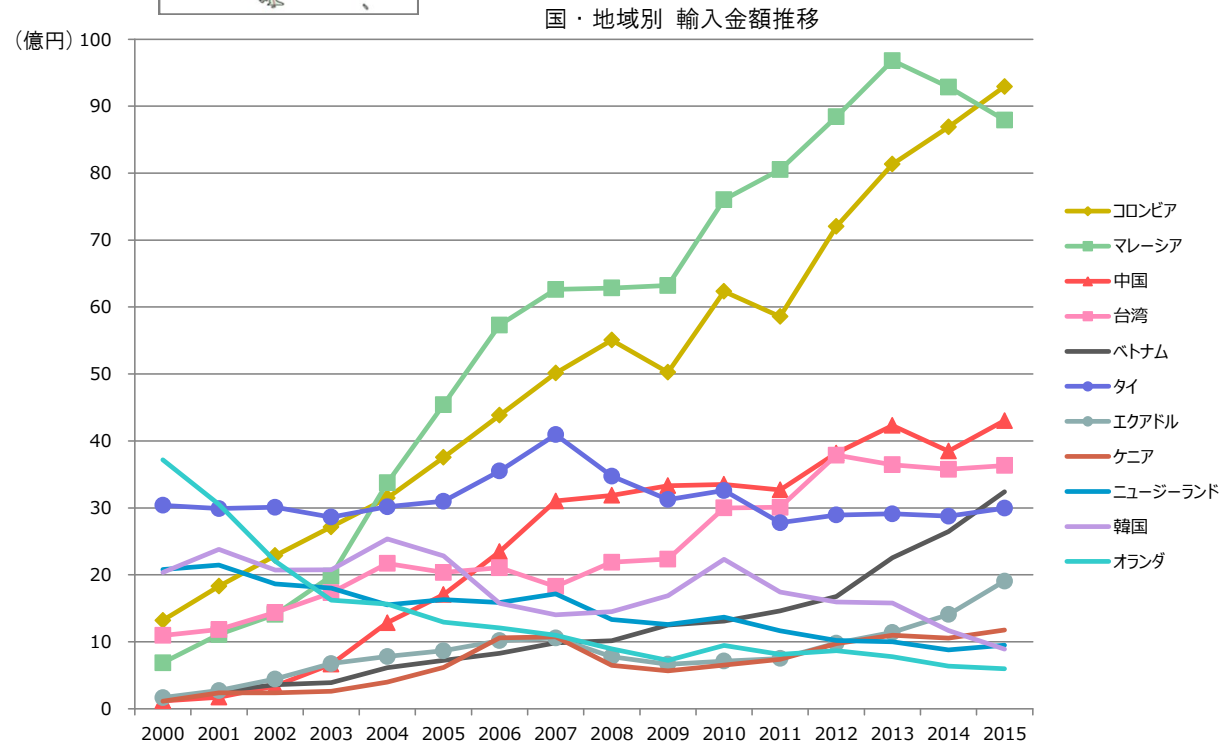
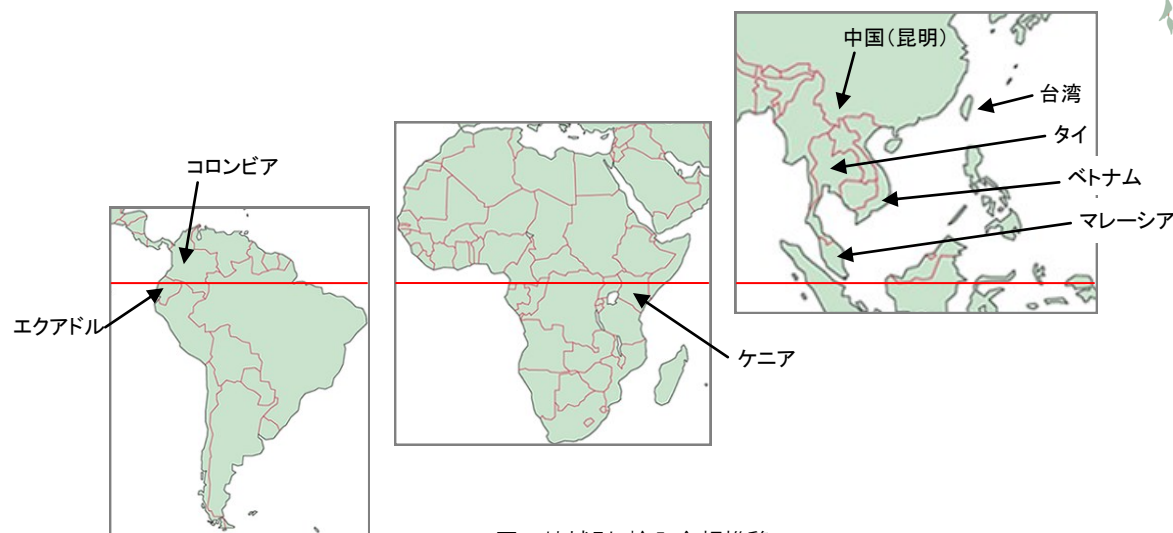
過去からの推移を見ますと、2000年にはオランダが首位でしたが、輸入額は減少を続けています。

代わって、マレーシア（菊）、コロンビア（カーネーション）、中国（菊・カーネーション）、台湾（らん）などからの輸入が増加しています。

切花の生産はもともとオランダが多かったのですが、近年は南米、アフリカ、アジアでの生産が増えています。

切花の生産には、日照時間が長く、昼夜の寒暖差の大きい熱帯・亜熱帯の高地が適しており、南米・アフリカでの生産は、赤道付近の高地が中心となっています。アジア地域の生産も、マレーシア（キャメロン高原）、ベトナム（ラムドン省ダラット周辺）、中国（雲南省昆明周辺）などの高地で行われています。

これらの地域は、四季がなく通年にわたって安定した生産・供給が可能で、これらの地域で大規模に生産されるようになったことが輸入増加の要因のようです。



輸入動向（港別）

成田空港が連続して首位

切花の輸入を港別に見ますと、長年にわたって成田空港が首位となっており、統計上比較可能な1979年以降、連続して首位となっています。

昨年（2015年）においては、全国の輸入数量の29.0%、輸入額の36.6%を成田空港が占めています。

成田空港における輸入の内訳としては、コロンビア産のカーネーション、マレーシア産の菊などの輸入が多くなっています。

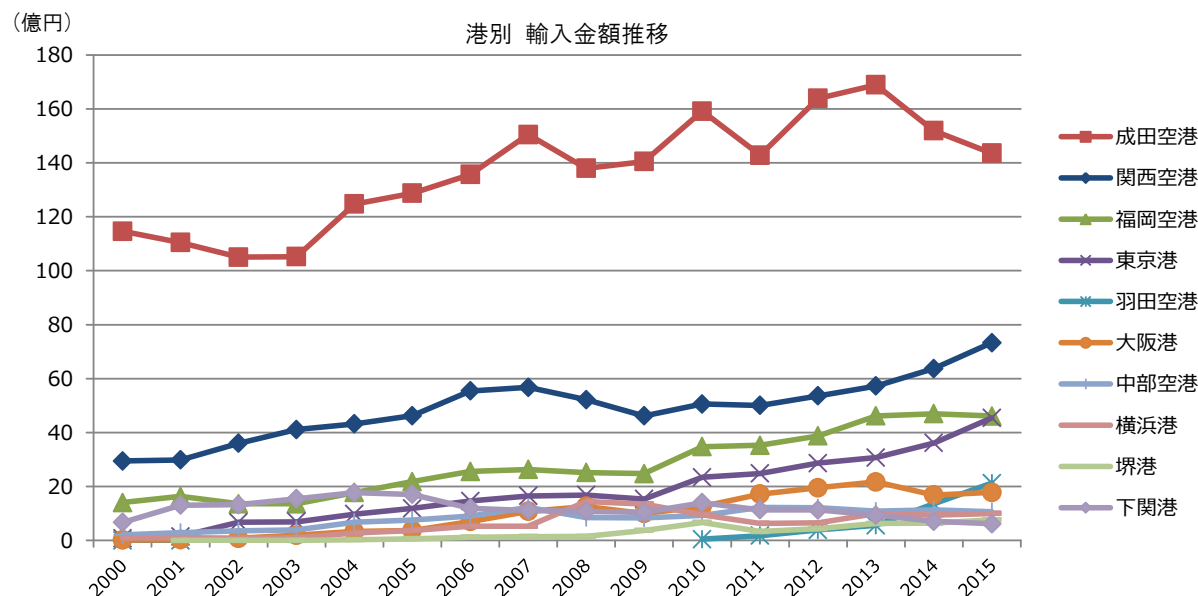
2位以下は関西空港、福岡空港と続き、生鮮品であることから航空便での輸入が多くなっています。なお、アジアなど近隣諸国からは船便での輸入も増えています。

輸入が成田空港に集中している理由については、生花の大消費地である首都圏を抱えていることが大きいようです。

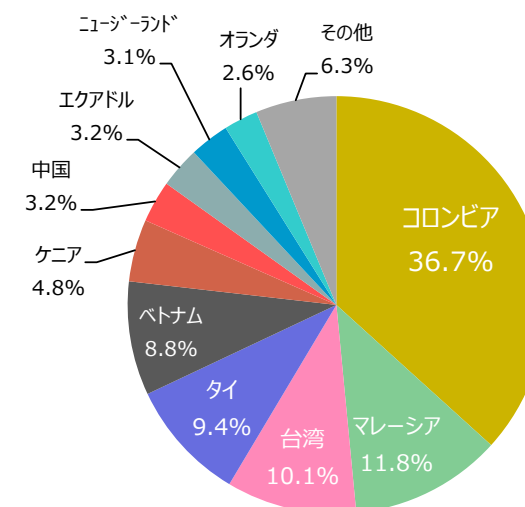
同様の理由で、羽田空港も2010年の再国際化以降は増加しています。

港別 輸入数量・金額（2015年）

港	数量 (kg)	構成比	金額 (千円)	構成比
成田空港	12,000,980	29.0%	14,356,913	36.6%
関西空港	7,031,241	17.0%	7,328,656	18.7%
福岡空港	5,248,133	12.7%	4,613,025	11.8%
東京港	6,314,415	15.3%	4,545,305	11.6%
羽田空港	2,071,148	5.0%	2,124,537	5.4%
大阪港	2,508,108	6.1%	1,785,649	4.6%
中部空港	1,448,575	3.5%	1,071,179	2.7%
横浜港	481,506	1.2%	1,001,693	2.6%
堺港	1,150,517	2.8%	768,606	2.0%
下関港	1,760,165	4.3%	618,640	1.6%
その他	1,322,240	3.2%	1,003,209	2.6%
計	41,337,028	100.0%	39,217,412	100.0%



成田空港 国・地域別構成比
（金額ベース・2015年）



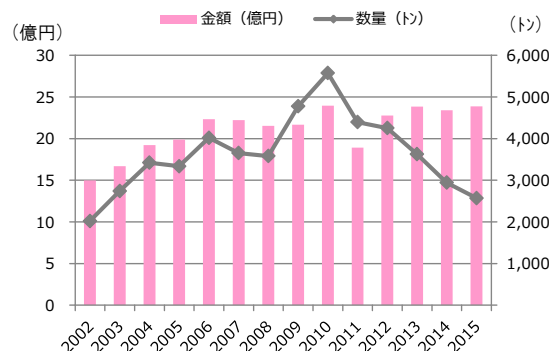


輸入動向（個別品目）

ばら

ばらの輸入額は、2011年を除けば大きな変動なく推移しています。数量については、重量は大きく減少していますが、本数では大きな減少にはなっていないようです。

国・地域別の輸入額の推移を見ますと、韓国、オランダ、インドなどが減少し、ケニア（44.2%）、コロンビア（14.9%）、エクアドル（9.8%）などの割合が増えています。また、2006年以降はエチオピアからの輸入も始まっています。（パーセントは2015年実績）

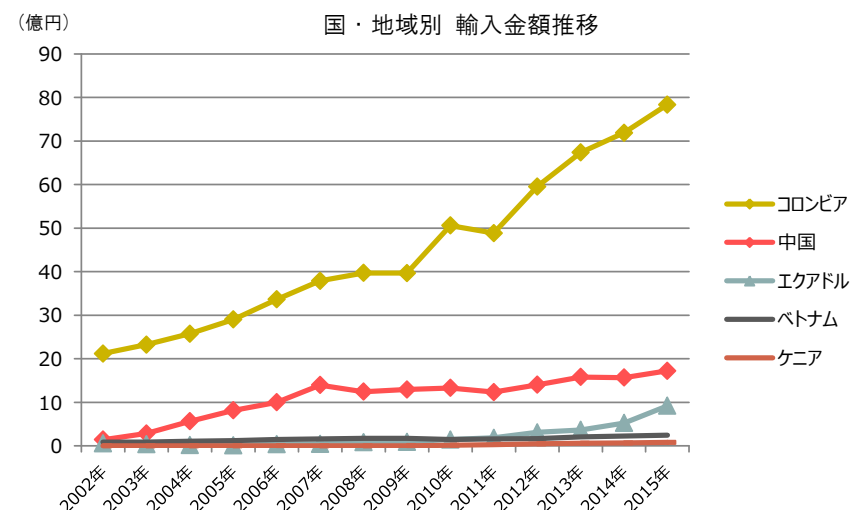
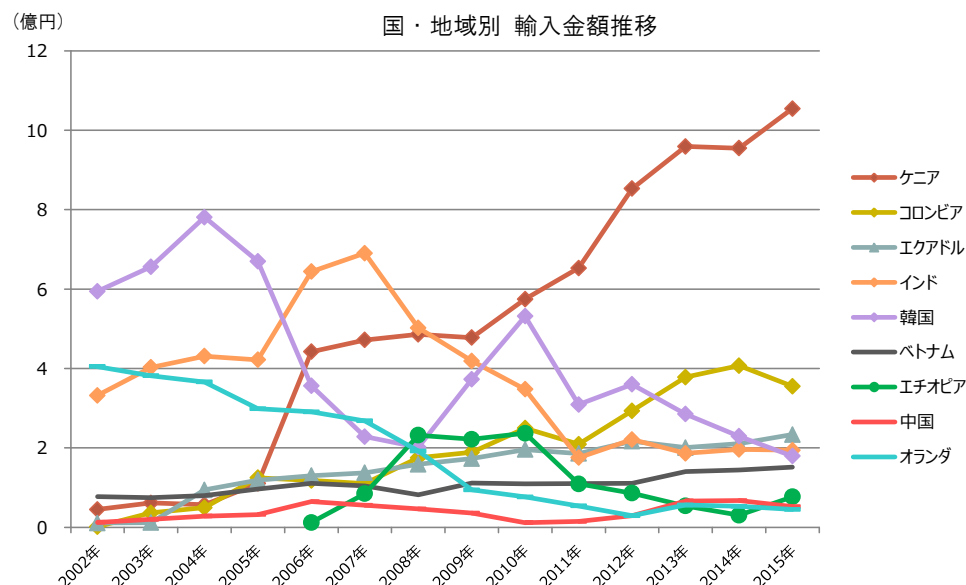
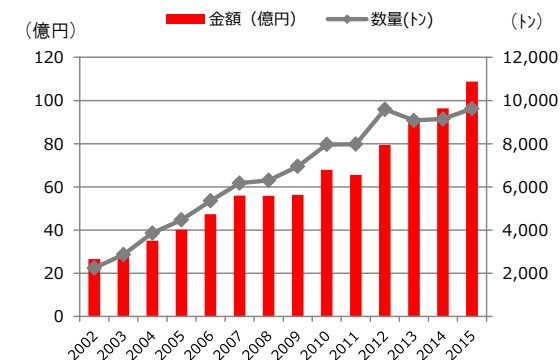


カーネーション

カーネーションの輸入額は増加を続けており、2015年は過去最大、4年連続の増加となりました。

カーネーションについては国内産が減少を続ける一方、輸入品が増加し、近年は輸入品の割合が半分を占めるようになっていくとのことです。

国・地域別の輸入額の推移を見ますと、コロンビア（72.0%）が大半を占めており、中国（15.8%）、エクアドル（8.5%）を含めた上位3カ国で輸入額の96.3%を占めています。（パーセントは2015年実績）





輸入動向（個別品目）

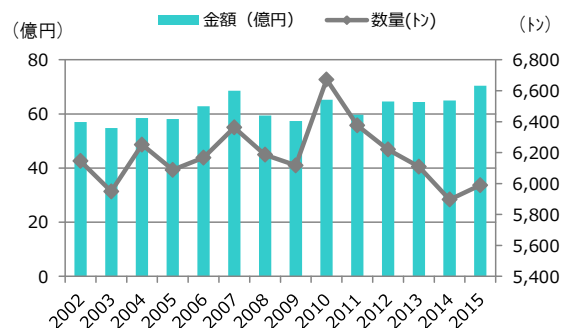
らん

らんの輸入額には大きな変動がありませんが、数量は減少傾向です。

国・地域別では、長年タイ(38.8%)が首位を占めており、品種としてはデンドロビウムが多いようです。近年は台湾(34.4%)の輸入額が増加しています。（パーセントは2015年実績）

また、ベトナムではオンシジウム、コチョウランなどの生産が増えており、輸入額も増加しています。

かつてはニュージーランド、シンガポールが一定のシェアを持っていましたが、近年は減少傾向にあります。



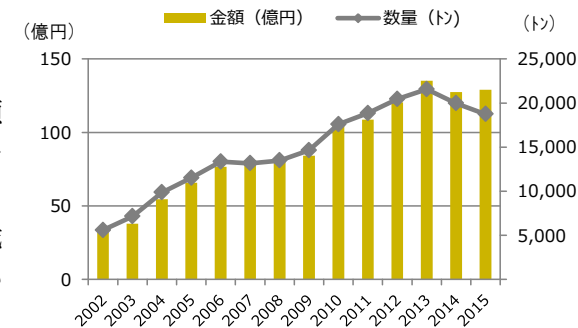
菊

菊の輸入数量・金額は2013年までは増加を続けていましたが、2014年以降、数量は減少傾向、金額は横ばいとなっています。

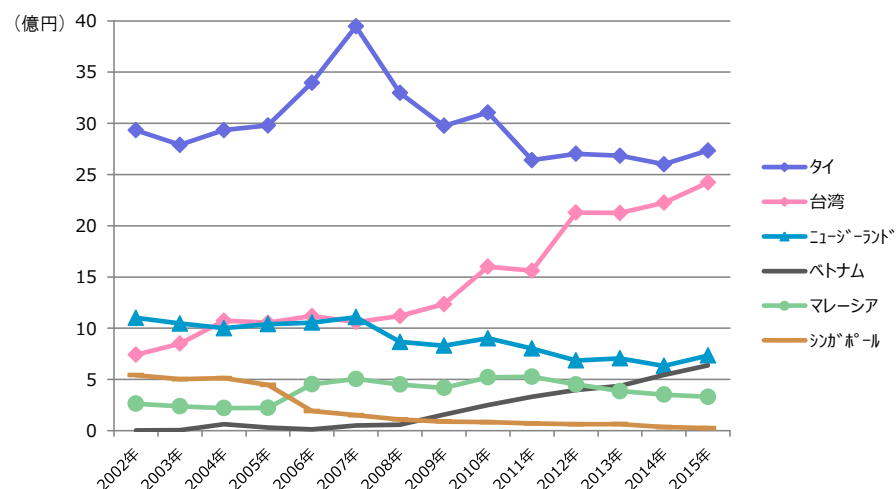
国・地域別では、マレーシア(65.1%)が首位で、長年にわたって大きなシェアを持っています。

2006年から2013年までは中国が2位でしたが、2014年以降はベトナムが2位となっています。（ベトナム16.4%、中国14.5%）

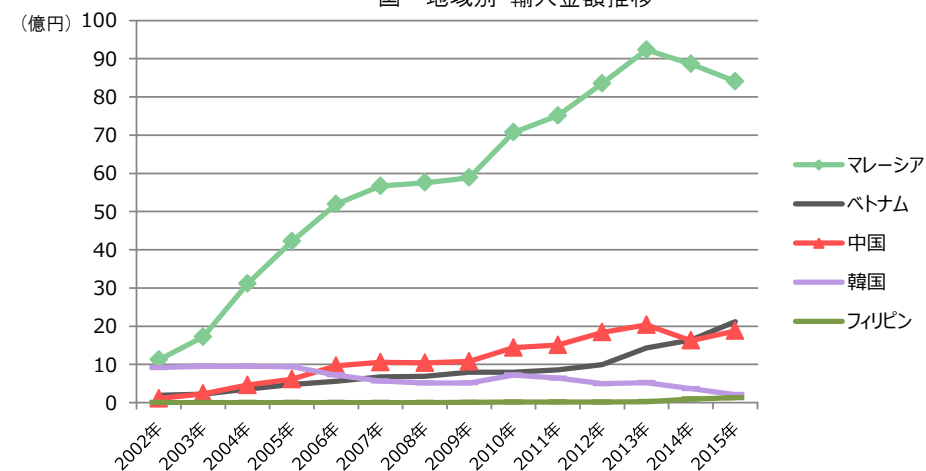
（パーセントは2015年実績）



国・地域別 輸入金額推移



国・地域別 輸入金額推移



【参考】エチオピアの薔薇

日本の輸入におけるバラの生産国はケニアが最も多くなっていますが、近年、エチオピアのバラ生産も拡大しています。

バラの生産には、日照時間が長く、昼夜の寒暖差があり、年間を通して日中の気温が20度程度の地域が適しており、赤道に近いアフリカの高地はこの条件に合致しています。

エチオピアのバラの生産は、もともとはヨーロッパ向けのために始まっており、現在もオランダ向け輸出が7割以上(※)を占めています。(※)国連統計(2014年)による

エチオピアから日本へのバラの輸出は、2006年頃から始まりました。

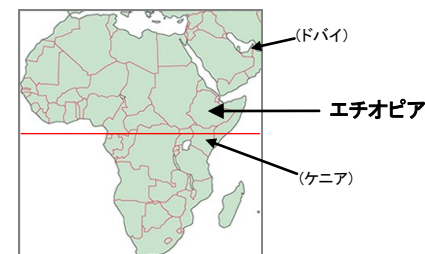
当時はアフリカから日本への直行便がなく、エチオピアのアディスアベバから、アラブ首長国連邦のドバイで積み替えられていました。

2015年4月、エチオピア航空が成田空港に就航し、日本とアフリカを直接結ぶ定期運行が始まりました。

これにより、積み替え時に常温にさらされるなどのリスクが減り、エチオピアで生産されたバラが、より安定した状態で輸入されるようになりました。

エチオピア産のバラは、日本への輸入量はまだまだ多くありませんが、2015年以降、増加が続いています。

また、エチオピアからは、バラ以外にも、切花と用途を同じにする、実の色が鮮やかな「ヒペリカム」なども輸入されているとのこと。



エチオピア産
バラ(スプレー)



エチオピア産
ヒペリカム

取材協力・写真提供：株式会社クラシック



東京税関

〒135-8615

東京都江東区青海2-7-11 東京港湾合同庁舎

<http://www.customs.go.jp/tokyo/>

貿易統計の数値はインターネットでも検索できます。

財務省貿易統計

検索

本資料を引用する場合、東京税関の資料による旨を注記して下さい。

本資料に関するお問合せは

東京税関 調査部 調査統計課 TEL:03-3599-6385